

# 家庭で行う金銭教育「おこづかい」。 お金と上手に付き合う力を養う 小学生のためのおこづかいのあげ方とは？

第18回

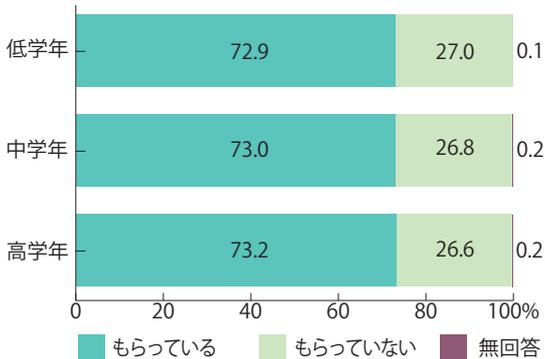
講師：大藪千穂

岐阜県金融広報アドバイザー

このコーナーでは全国で活躍している金融広報アドバイザーによる誌上セミナーを行います。今回のテーマは、家庭で子どもにお金の価値や使い方を学ばせる「おこづかいのあげ方（始める時期・渡し方・金額設定）」。

このコーナーでは全国で活躍している金融広報アドバイザーによる誌上セミナーを行います。今回のテーマは、家庭で子どもにお金の価値や使い方を学ばせる「おこづかいのあげ方（始める時期・渡し方・金額設定）」。

【図表1】おこづかいの有無(小学生)



(出所) 金融広報中央委員会「子どものくらしとお金に関する調査(第3回) 2015年度調査」を加工して作成

「おこづかいを通して学ぶ」「計画力」「自制力」「感謝の心」

金融広報中央委員会が公表している「子どものくらしとお金に関する調査(2015年度)【図表1】」によると、小学生の7割強の子どもたちがおこづかいをもらっていると回答していますが、周りの家庭でもあげているからと、あまり考えずにおこづかいをあげている例も少なくないと感じます。おこづかいは家庭で金銭教育を教える大切な機会であり、金銭感覚を養う教育ツールであると、私は考えています。

金銭教育におけるおこづかいの大切な役割は、子どもたちにお金の価値を認識させ、お金の上手な付き合い方を学ばせることです。自分でお金を管理しながら使い方を考える「計画力」、買いたいものを我慢する「自制力」が身に付きます。

多くの保護者はおこづかいを、幼稚園に通い出したら始めるべきか、小学生からがよいのかなどと悩んでいるようです。小学校入学前の子どもにいきなりおこづかいを渡して、自分で管理させることは難しいので、私は小学生になってからでよいと思います。小学校入学前には「プレおこづかい」として、子どもと一緒に買い物へ行き、「欲しいモノを自分で買っていいよ」と1回100円くらいを渡して、買わせる経験をさせるなど「モノとお金の関係」を体感させましょう。

「おこづかいのあげ方とは？」

おこづかいを始める前に決める「始める時期」、「渡し方」、「金額設定」は、お金と上手に付き合う力を養うための重要なポイントとなります。

① 始める時期

おこづかいの渡し方も悩みどころです。渡し方は主に、「定額制」、「報酬制」、「都度制」があります【図表2】。

「おこづかいの渡し方」の比較

ため、「計画力」と「自制力」を養うことにつながります。しかし、何もしくなくもおこづかいが手に入るため、お金のありがたさを感じづらいうというデメリットが考えられます。

お手伝いの対価としておこづかいを渡す「報酬制」では、お金の重みや働くことの大変さについて身をもって学ぶことができず、一方、本来お手伝いは家族の一員としてやるべきなのに、お金目当てになってしまうことが懸念されます。

必要なお金を必要ときに渡す「都度制」は、お金を使うことだけが目的になつてしまいがちに。先述した「小学校入学前の子どもと一緒に買い物に行つて、少額のお金でモノを買わせる」といった

	定額制	報酬制	都度性
渡し方	一定期間(毎週や毎月)で、決まった金額を渡す	お手伝いなどの対価としてお金を渡す	子どもが要求してきたときに、必要な金額を渡す
メリット	一定期間のなかでお金を管理することで、計画性や忍耐力が育つ	働くこととお金のつながりを体感し、稼ぐことの難しさを認識する	お金が必要な理由を親に説明するため、プレゼン力が身に付く
デメリット	おこづかいをもらえることが、当たり前かと思ってしまう	お金がもらえないお手伝いはしなくなることも	計画的にお金を使ったり貯金する能力が育ちにくい

【図表3】小学生のおこづかい額(月1回渡す場合)

	最頻値	最も多い金額帯	中央値
低学年	500円	500~700円 未満(22.6%)	500円
中学年	500円	500~700円 未満(25.8%)	500円
高学年	500円	500~700円 未満(37.9%)	1,000円

※1 最頻値は、最も多く回答された値。中央値は、回答金額を多い順に並べた場合に真ん中に位置する値。

※2 ( )内は、当該金額帯の回答者の全体に占める割合。

(出所) 金融広報中央委員会「子どものくらしとお金に関する調査(第3回) 2015年度調査」を加工して作成

プレおこづかいの一例と考えてください。私がお勧めしたいのは、金銭感覚をしっかりと養える「定額制」です。お金のありがたさを感じづらいという「定額制」のデメリットをカバーするために、「報酬制」を組み合わせるのもよい方法かと思えます。ふだんは「定額制」にして、いつもより多くお手伝いをしてくれたら「報酬制」でボーナスとして渡すなど、ご家庭のルールや考え方に合った方法を組み合わせてみるとよいでしょう。最初は2日に1回や週に1回など短い間隔から始め、お金の管理に慣れてきたら徐々に徐々におこづかいを渡す間隔を長くするとうまくなります。

### ③ 金額設定

おこづかいの金額設定は、おこづかいに何が含まれるかによって違ってきます。「鉛筆と消しゴムは自分で、参考書とノートは親が買う」というように親子でル

ールを話し合ってから決めると、子どもは納得しやすいと思います。金融広報中央委員会の調査にある「小学生のおこづかい額」【図表3】を見ると、小学校の全学年を通して最も多い金額帯は500円、700円です。中央値で見ると、低学年と中学年が500円、高学年は交友関係が活発になるため1000円となっています。こういった調査結果の金額を参考にしてもよいと思います。

### 電子マネーを活用して 効果的に おこづかいを管理

最近では、電子マネーでおこづかいをあげる人も増えています。「おこづかいは減っていく様子が目の前で見える現金の方が向いている」という意見もありますが、現金も電子マネーもお金であることに変わりはありません。キャッシュレス化が進むなか、電子マネーに関するリテラシーを持たせることも大切な金銭教育ではないでしょうか。チャージタイプの電子マネーなら使い過ぎることもなく、残高や履歴が数字で表示され、具体化されることで効果的に おこづかいの管理ができます。金銭教育を行ううえで管理はとて大切なことであり、それができていればどちらであってよいと思います。

### おこづかいの日は親子で お金コミュニケーションを

おこづかいであげ方以上に重要なこと

は、「親子で管理」することです。親の目が届く年齢のときこそ、親子でおこづかいの使用状況を確認し、子どもが何を学んだか、何にハマっているのか、これから何を学んでほしいのか、そういったことを共有してください。そのために、おこづかいの確認や振り返りができるようおこづかい帳を付けさせましょう。親も家計簿と一緒に付けると、おこづかいの日に、おこづかい帳を子どもと一緒にチェックします。その際、使い道などについて、親は口出ししないようにしたいものです。「使い過ぎ」、「お金がすぐ足りなくなる」、そういった失敗は金銭感覚を育てる絶好のチャンスなのです。とはいえ、使途不明金が発生している場合は、おこづかいをストップするなど、親として厳しい姿勢を見せることも大切です。親子で決めたルールは必ず守り、使い過ぎて増額を希望してきたとしても、自分の管理ミスですから増額はしない。将来お金で苦労しない大人になるための経験の場と、温かく見守ってあげてください。

おこづかいは、子どもにお金の管理を学ばせる場であると同時に、親子のこ

ミュニケーションを深める場でもあります。おこづかいの日は、親子でお金についてあれこれ話し合う日にするとうまいでしょう。家庭におけるお金に対する考え方やルール、わが家の金銭状況などを子どもに伝えることも重要だといえます。常に子どもの声に耳を傾け、ふだんから様子を見てあげることも忘れないでください。

おこづかいは、人生教育そのものだと感じます。おこづかいをきっかけに、金銭教育の枠を飛び越えた学びの場をつくらせてもらいたいと思います。



大藪千穂 (おおぶ・ちほ)

岐阜大学教育学部教授(家庭経済学)。30年にわたり紙面やネットで「家計簿アドバイザー」を実施。金融広報アドバイザーとして、児童・生徒や教員、PTA対象の金融教育を担当。教育や老後用の「エンディング・プランニング・ゲーム」を開発し、1,000人以上に実践し、情報活動やリテラシーと教育効果の関係を分析している。著書に『ちほ先生の家計簿診察室』(名古屋リビング新聞社)ほか多数。

### の 回 今 め と ま

- ★「計画力」、「自制力」、「感謝の心」を身に付けて金銭感覚を養う。
- ★渡し方は「定額制」をメインに、「報酬制」をボーナスに。
- ★おこづかいの日は親子でお金コミュニケーションを深める。